

勤王家青木猛比古先生

故下川勝二郎

明治維新の大業は幾多勤王家の血腥い御奉公に困って大成されたものでありまして、当時勤王の志士が死線を往来すること恰も平道を行くが如く、朝に密議し夕に四散し、作日は東に今日は西にといった様なめまぐるしい生活をされた様子を、今日の腐れ爛れた世相と対照して仰ぎ見る時、本当に無量の感慨に打されざるを得ません。されば此等勤王の諸家は或は神社に祭祀せられ或は贈位の恩典に浴し、或は青史に其の美名を謳はれ、或は高位顯官を報いられるなど、国民の崇敬を浴びぬはありませんでした。然るに茲に我が郷土海部の天地に唯一人の勤王家たる青木猛比古先生の至誠が、其歿後六十有餘星霜を経過せる今日に及ぶも未だ郷党にさへあまねく認められず一片の墓石さへ建てられてゐないといふが如きは実に痛嘆に堪へない事ではありませんか。先年今上陛下御即位の御大典に当り、端なくも贈位請願の事が識者の問題となつたのでありますが、死処を許さない事の為に遂に詮議にならなかつたさうであります。志かし此の死処の定かでないといふ事こそ実は真固先生の面目を躍如たらしめるものであつて、先生が最後に帰省せられた時『墓が七つ建つたら愈々死んだものと思つてくれ』といったと申しますから、死線の上を変現出歿する先生には素より死処などは全く問題外だったのであります。さはいへ、江国寺畔秋草の繁るに委せて朽腐倒壊せる木標の前に低徊する時、いかでか此の偉大なる暗黒さに咽ばずに居られませう。教育勸語御煥発四十周年、精華爛漫として映発する時私は処のめぐまれぬ郷土の勤王家に就て、どうしても口を緘することが出来ないのであります。以て確実なる資料により調査した結果を紹介して、特に郡内少年青年諸君の御一読を願ひ度いと思ふのであります。

先生は天保二年三月堅田郷柏江村（現下堅田村柏江）の農家に生れました。父を清助、母をセツといひ、二人の妹と共に三

人兄弟でありました。父は他日先生が麒麟児として王事に奔走せられるとも知らず世を早うしました。家元より貧しく、三人の遺児を養育する母の若勞は並大抵では無かったのですが、先生は天性剛毅放騰でしたから母の辛若などに気のつかばこそ其の腕白さと来ては迎も女手におへるものではなかつたと謂ひます。そこで母はつくづく考へました。『此子は迎も私の手におへるものではない。悪に強いものは善にも強いといふから、いつそ僧侶としたなら或は大知識になれるかも知れない』と、親類知人に相談の上いよいよ下野村(今の鶴岡村)の開福寺に弟子入りをさせました。それは先生やつと七歳、天保八年の事でありました。だが先生の品行はなかなか良くならないばかりかますます腕白が募つてゆく一方で手きびしい師の呵責も一向そのかひがありません。或る日先生は師の午睡を見すまして『冀尚 思ひ知れツ』と大音声で呼ばはったかと思ふと、いきなり裾をまくつて師の固い頭の上に放尿したのであります。びっくりして跳ね起きた師は慣るまいことか、直に引捕へて荒繩で縛り上げ松の枝に吊して終日窮命に及びました。しかしそんな事で懲りるやうな小僧ではなく、其後も度々目に余る悪戯をして憚らなかつたと申します。こんな腕白小僧だったにも拘らず師は之を追出しもせず、日夜諄々と訓へ論したといふのも外でもありません。実は先生は一を聞いては十を知るといふ異常な天才児で、而も一度書物を手にするや寢食を忘れて倦むところを知らぬ勉強家であり、殊にその凜然たる気魄に至つては容易に得がたいものであったので、師は其の師導を誤らざるに於ては他日必ず非反の映僧たらしめ得ることを固く信じてゐたからであります。

先生海福寺に在ること十有餘年、齡正に二十歳を越えました。或日豁然として悟りました。「人間といふ者は岐路に迷ひては大道が目にかゝらず、井戸の底にゐては天の広さを知らないものだ。思ふに仏は夷狄の法である。釈迦何者ぞ、畢竟唯是れ蕃神に過ぎない。然るに自分は神州に生れ神州の米を食ふ日本男児でありながら、夷狄の法を信じ蕃神に仕へるとは何たる意氣地なしであらう。殊に今や天下の形勢を察するに内外多事、上下人心洶々として皇国の前途実に暗愴たるの時ではないか、宜しく還俗して天下を濶歩し、諸国勤王の志士を訪ひ大に同志を糾合して皇国の為に尽すべきではない」と、一度大悟しては矢も楯もたまず、十有餘年修養し來つた仏道を古草履を脱ぐ様に抛ち、遂に海福寺を脱走して、決然諸国遍歴の途に就いたのは

実に嘉永五年、先生廿二才の時でありました。其時作つた詩がありました。

本是神州清潔民、誤為仏徒説風塵、我今廢仏休悵恨、元是神州清潔民

其の意味は自分は元來生粹の日本男児でありながら、不図した事から僧侶となつて説教などをやつて来たが今こそ大悟して仏教を捨てるのだ、仏よ自分を恨むなどいふのです。実に痛快な作ではありませんか。此の詩は端なくも時代精神と共鳴し、當時洽く天下に流行して、都も鄙も大小たばさんだ青年武士の愛吟措くあたはざる所となつたのであります。

決然海福寺を脱出した先生は、先づ上方へ上り天下の情勢を明かにした上で徐ろに事を図らなければならぬと考へたので、当時大阪中寺町法雲寺に住職を勤めてゐた叔父萬冥を訪ねて還俗の理由を述べ、彼の清潔民の詩をも見せて大志を明かし、暫く此処に滞在することとなりました。其内に京都の神祇伯從二位白河資訓王の熟誠王事に尽され給ふ由を聞くや敬慕禁じがたく、度々萬冥に願つて拜謁のつてを求めたのですが、其願遂に、容れられて、或日のこと資訓王のお目通りが許されました。先生は天にも昂る心地でこゝぞとばかり赤心こめて勤王の大志を打明けたのであります。すると王も亦深く其心ざしを嘉したまひ、とりあえず先生をば暫く其の邸内に止めることになりました。時恰も安政元年、前年六月米艦四隻浦賀灣頭を騒がした後のこととて、国内はもう上を下への大混雜の最中だったのであります。

先生は誠意正に王に仕へましたので、やがて伯王の爛眼に触れ、十二月といふに九州遊説の大任を授けられました。先生九州に下るや、一旦郷里を訪ひ、再び豊筑の間に遊説し、それより馬関に出で、防長の境に入ったのは安政二年の暮より三年にかけての頃であります。豊筑途上作詩があります。

七道望風佐賊謀、何識此境是神州、鎮西多唱悲歌士、当年菊軍今有丕

菊地一族の忠義を追想して感慨無量だつた様が目に見えるやうであります。

先生は安政三・四年頃より文久の初頃迄防長と京都との間を往来し、只管国事に尽瘁して席温まる暇もなく、帰省はおろか手紙さへろくろく郷里に出さなかつたのですが、文久二年になつてやつと郷里を訪れることが出来ました。此時は暫く滞在して

親類知己も久しぶりに交情を温めたのですが、纏て又飄然と京都へ向けて出発しました。

翌三年七月郷里の近親知人へ宛てた手紙は先生を知る上に大切なものですから次に抄記致しませう。

…：権現様額字神祇伯王殿に願候通り、熊野神宮と御染筆殿下難有御事に奉存候右につき皇都にて、彫刻致し送申度と存候へ共遠路の海陸殊に拙者近日長州表へ罷越候旁不得其意即本書送候間其地にて彫刻の御世話頼上候、申上候迄も無御座候へ共カゴジに写し本書は表具致し永く貴家か又は役元へとどめ置候様御尽力頼上候…：…：此度は宮様堂上様方より種々拝領もの有之、数多上京の諸候の前にて稀代の面目先祖への申分と難有奉存候。右の品々の中五条殿より拝預の色紙置棚その他書類お電（りょう）へ預け置候為送候間拜見可被成候…：材木は柱にでも貫にでも大工の使ひ様にて何にも成可申、人も其の如く心の用ひ様にては武家は勿論大名にもなられ候間心掛が専一の事にて、祇迢は和尚になり物助は庵主となり拙者は武家になり其外親類中に紺屋大工博徒網打種々有之、是皆心の持様による事に御座候間、心は正直、人交りは信義を尽し平生筆道文字に心をよせ候はば立身出世は出来候事に候間、何卒親類中の若者共は常に心掛けせめて手紙文なりとも読め候様に一同有之度存候、市谷虎五郎儀拙者手元に引取り育て見申度存候。市谷叔母様へ貴様より相談致し見呉候様頼入候。有栖川宮様より綿の陣羽織地袴巻拝領仕候間早速仕立残り切れにて守袋三つ仕立、市福所おまさか子柏江おゐひお七にも遣はし申候拙者かたみに市福所へ御届可被下候。…：…：（中略）…：…：京都にて熊野権現の御靈驗に度々危期を遁れ候儀に付叔母連中へ貴様より御相談して御礼参り致呉候様御取計頼入候殊更此度伯王様へ奉願上候而御額字頂戴仕酒屋、考治郎、柳太郎、安藏の四人に御本書送申候間今人衆中より拙者親類にも嘶も可有之に付少々彫刻料奉納可被成候これは拙者の武運長久を祈為に候間是又貴様より世話候様有之度候、（後略）

先生が京落防長を舞台にして如何に王事に尽瘁されたかは、宮、堂上の方々から種々の品々を下賜されてゐる事でも明らかであります。殊に有栖川宮様から錦の陣羽織地を賜った如き其の勲功の容易でなかつた事を雄弁に物語って居るのであります。

市福所の家に守袋となつてゐる此の陣羽織地を拝見して見ますと、弁慶縞に牡丹の花をあしらつた、まことに絢爛な美し

い錦地であつて、眼病復痛などの者ある場合、家人は之を押しただいて今に病を癒してゐるといふことであります。

此の手紙にも一寸あらはれてゐる通り、先生は後進を扶掖教育、一ぱしの人物に養成せん事を心掛けてゐられた足田実(泉氏の実父)の如き先生の手引によつて白川邸に入るべく、すでにかたい決意をなし、將に乗船上落せんとして、何かの手違によつて事終に止んだのであります。而して此の手紙に於て、殊に吾人の深く感憤に堪へない点は、先生の近親を諄々と訓へ諭すあたりであります。先生は大教育家の風格をそなへて居りました。僅かに三十をこそこの燃烈火のもゆる如き愛國の志士の胸中にかゝる老成人の又教育上の理想をもたれてゐたといふことは興味津々たるを覚えしめます。

右の書翰を出された文久三年八月下旬、当時の廟堂の指導精神たる攘夷親征の朝議にはかに一変、三条、三条西、東久世、壬生、錦小路四条、沢の諸卿は「長州の慕論に与し、妄に聖慮を矯め奉り、夷狄親征の事を主張するもの」として、其の官位を削られ京都を追放されたので、長州をさして落ちて行きました。世に所謂七卿落と申します。

此時先生は白川王の内命によりまして、長兵と共に七卿護衛の任にあたつて、長州へ下つたのであります。翌元治元年任務を終て帰洛すると、神祇伯は愈々先生を家臣として、近習席にまで御取上げになり、更に古道学事の研究方を仰付になつたのであります。左の事付を参照して下さい。

青 木 猛 比 古

其方儀今度御家来に被差加御近習席被仰付候間古道学事向研究可有精勤之旨伯王殿被仰候此段申達候以上

子年十一月

村 上 出 雲 守 正 武

安 部 備 前 守 貞 愷

右は申すまでもなく当今の言葉でいふ辞令書であります。

此月二十八日先生は神祇道向の名義で京都を出発して豊後に下向致しました。此の時長三州が大分郡植田村光吉の里正首藤周三の家にあることを知り、之を訪うと暫くこゝに滞在、四方来遊の志士と交り、互に肺肝を披瀝して語り、一死君国に報

いん事を誓ひました。此の首藤邸に於ける青木、長、二巨頭の会見は、先生にとつても、三州にとつても、自余二豊の志士にとつても、最も重大なる意義を持つものでありまして、これ等二豊勤王家はこゝに大同団結をして、他日の旗上げを企画したのであります。此の首藤周三と申すには、広瀬淡窓の門人で勤王の志厚く、元治慶応の頃四方の志士のシンパで、勤王家を我家にとゞめて後援してゐたが、後、幕吏に捕へられ日田の獄に投せられた方であります。先生は屢々此所を訪ねて、長い時は半年も逗留することがあったと申します。此の人の話によると。

「先生はあまり大きな体軀の持主ではなく所謂中肉中背といったところだが、眼は煙々として光りかがやき、眉のあたり一脈の英気颯爽としてみなぎり、天晴れ志士の風貌を具へて居り、其の腰間帯ぶるところの太刀は馬鹿に長大なもので、其の尻に滑車をつけるといふ有様故同志の間には『猛比古にすぎたるものが三つある眼玉膳玉太刀の長さよ』』と云つて打興したものださうであります。

尚此の豊後下向について先生の使用せられた通券がのこつて居ります。

一、人足 三人

一、宿駕籠用意一挺

右者神祇道御用向有之御家来青木猛比古明後廿八日京都出發伏見宿所出にて西海道行豊後国直入郡朽網安照寺方迄被差向候に付書面の人足無滞繼立上宿舟川渡等差支無之様取斗可給候

以上

白川殿御用場印

宿々間屋役人中

舟川肝煎中

実に大したものではありませんか。以て天下を横行濶歩するに足る。先生は此の特権を常に利用して、京師防長豊筑天草等

の天地をステージとして勤王のために、みづくかばくさむすかばね、生命をなげうちて活躍されたのであります。

慶応元年三月先生は慧星の如く宇佐郡にあらわれました。しかししてしきりに同志を曾聚して尊王攘夷を高唱しました。即ち五月二十五日楠公戦死の日を記念して楠公曾と申す勤王結社を組織し自ら主宰してゐました。爾来毎月廿五日を期して、大に楠公祭を営み、其の遺烈を物語り、国事を論議して、士氣の振作に力めたのであります。長三州大に此の挙に賛し、先生のために一詩を賦して贈りました。

楠樹化石歌為青木猛彦作

警雷劈山骨立、一朵瘦石星偕落、千年堅質化貞珉、文繳理密貴於壁世間却火日夜災枯骸風揚飛灰白人有楠芬

芳萬古漂不滅吁嗟乎捐義徇利朝暮人臭腐那得比斯石

右は「三州居士集」の中のものこつて居ります。(註曰此楠樹化石は後出時枝家所蔵にて見事な品であります)。又柏江野々下家に保存されてゐる先生の短冊に

七度も人と生れて皇君にあかき心を尽してしがな 健彦

といふのがありますが、吾人はこれを見ることに、楠公を憧憬する先生の至誠をおもつて肅然襟を正さずにはゐられないのであります。

先生が宇佐郡で活躍された当時の模様は宇佐神宮神職時枝重明翁が自署した「日田獄手続書」の中に躍動してゐますから、其の一節を摘記して見ませう。

(前略) 慶応元年四月青木猛彦と申すもの來郡し、白川殿の臣下と称し、慷慨国事を論じて曰く、「余は元來竹田の産で世々医を業とす先年岡藩の土小河弥右衛門等を始め、勤王の志士數十人上京し、上国の志士と交友してゐたが、小河等は藩命を以て叛国し、余一人滯京して白川殿に奉仕してゐた。然るに天下の大勢を洞観して大に感ずる所あり、再び下向し、長州人士とも計り、大宰府に入り、三条公にも面謁し、其の内意を得て來た。宜しく両豊の地に於て同志を計ぬ、尊攘の明を待

ち、祖国の為歿したいと思ふ、願くは御賛助を得、全志を糾合の勞を取られたい。尤も京師に於て奥並継氏に曾し、其の指図により当地をさして罷越したもので御座る。御存じの長光太郎（註曰長三州）も豊後光吉に潜伏し、同志を語らうて居る。之赤来曾を約し、豊後でも同志数百人を得たれば、尊攘の期を待ち、何時にても出兵しようとして居る。右の次第、当分当家へ逗留相可されたい云々」繁樹も篤と承り素より神職の身分か、天朝への御奉公然る可く考へ社中の有志と相議りた所が永弘出羽守岩根、小山田播摩守貞文、石坂瑞枝、吉弘解由敏夫等進んで同意したのである。然るに青木氏は五月六日（慶応元年）同志を催すべく肥前天草に罷越し、暫く音信もなかったが、翌二年三月になって後飯来して曰く、「天草にも同志数百を得たり、素志貫徹の日が遠からぬ事であらう」と爾来引継ぎ拙家に淹留し訪客の応接に多忙を極めてゐた。五月下旬になると、幕軍が長州を包囲してゐるとの飛報があつた。いざ時機到来武器を調べ、大宰府に越し三条公を奉じ、長州に応援せんと一段の景氣を呈したのであるが、青木氏は長光太郎に計る処ありと、豊後へ急行し、七月下旬になって帰来して言ふに「今回光太郎等に合し、別府烟草屋で金策し、小銃彈薬を調べ、不調品は高田、中津で補ふべく、尚軍費は珠の舟手にて調達、遠からず送來るの筈、光太郎も近日引越すべし」と機械方六七人も従へて來た。間もなく光太郎も約の如く來投し、種々劃策してゐたが、光太郎氏は形勢視祭の為の單騎小倉へ向け出發した。（後略）

先生の暗中飛躍ぶりが眼前に髣髴としてくるではありませんか。

右の「重明翁入獄手統書」にある通り、長三州は形勢視祭のため小倉にむけ出發したが、三州は所謂鉄砲玉で、行ったきり長軍に投じて一向帰つて來ません。先生は非常に焦燥を感じて遂に其後を追ひました。時恰も幕軍の或は石州口より、或は芸州口より、或は海路豊前より兵を進めて、防長二州を包囲し、戦雲漠々殺氣空に漲るの時でありました。先生の「怒猪の猛げき心」はもう如何とも制することが出來ず、直に高杉晋作直卒の奇兵隊にと小倉攻撃軍に参加し、奮戦力闘、小倉を破り小笠原勢をして、八月一日火を自ら城中に放ち、同国香春に敗走するの余儀なきに至らしめました。此時先生は例の長刀を振つて目覚しい働きをなされました。劍劇を観る様な先生の奮戦ぶりは想像するだけに愉快であります。八月四日論功行賞があり、長

門藩主毛利大膳太夫の長子長門守から次の如き感状並に脇差一腰を賜はりました。

去る廿七日小倉表の合戦無比類勳感悦不斜候当座之賞脇差袴腰令進候謹言

八月四日

長門守 花押
青木猛比古殿

此の感状並に脇差は完全に現存してゐます。そして先生は此の合戦に於て自ら手にかげられた敵の首級代りに其の陣羽織の紋所を切取つて保存されてゐたといふが其の陣羽織の紋所は今どこにも見あたりません。かくの如く長軍に投じて奮戦してゐた先生は、奇兵隊首領等のなす所に聊か不満を感じる所があり、かねて素志をつらぬくべく再び宇佐に帰りました。そして種々劃策中、大宰府の三条実美公から「長州征伐和解、当分出兵見合せよ」との飛札がありました。於是同志と相議し兵器を神宮内に秘し同志待機の姿勢にうつる事となりました。

恰此頃の事、長三州の弟に春堂と申す志士があり、或日石垣村矢田塾に父南染を訪ひ、亀川高橋万之進宅で兄三州に合し、其の命をふくみて翌日豊前に入り宇佐のとある家に潜伏中の先生とはじめて会見しました。二人は暫く討談するうち、百千の知己の如く打ちとけ、時事問題につき胞襟をひらいて意見を交換しました。それより先生は兵器を見せる為春堂を神宮に案内致しました。此時一門の大砲が人足繁き往來の傍に据ゑられてゐたので春堂は大に訝り、先生に向つて「極秘に附すべき兵器をかく路傍に曝すこと、万事露見のものとなれば、速に何れかへ隠しては如何で御座る」とたしなめました。すると先生はどうしたのか憤然と色をなし「貴公如き藪医者のしかも若輩者の知るべき限りでない。是我徒の威力を示し、同志を糾合する示威運動に外ならず。貴公にして敢てかくる愚言を弄するに於ては、先づ貴公を斬つて軍陣の血祭に上げようぞ」と大音声に呼ばはつたからたまらない。血氣の春堂此の慕言に赫となり、やがて往來の真中で二人血相をかえての大激論をぶつ初めました。腰間の秋水まさに鞘走らんとする危機に時枝重明其地二・三の同志馳せ参り、カンカンになってゐる二人を宥めて、「今我徒の重大なる期期に際し、兵器問題に關し、しかも往來にて激論するとは、日頃の両氏にも似ぬ浅慮の所作では御座らぬか。御

慎みあれ。さりながら之も大事を思ふ熱情のしからしめるところ」と和解させて漸く事なきを得た。春堂帰郷の途次再び高橋邸に阿兄三州を訪ひ、此の顛末を語り聊攻撃的口吻を用ふると、三州は完爾として笑つて曰く「青木は吾等同志間に於て最も主要なる人物で、殊に日田陣屋襲撃の陣互は彼の手腕にまつものが多いのである。」と説き聞かせたのであります。以上は日田の故老の手記中から見つめた先生と春堂との合見談であります。

慶応元年の暮先生は長三州、高橋清臣、原田七郎、太田包宗、奥並繼、柳田清雄等の同志と相謀つて郡代窪田治郎右衛門を襲撃し勤王軍の急先鋒たらうと計劃し後更に福岡の桑原範蔵玖珠の木村義路、佐田内記、安心院の下村次郎太、田染の安東信哉等当年血気の二豊志士を網羅して耶馬溪木子岳東麓に合し大に謀議を凝らしたのであります。ところが今や將に事を挙げんとするの利那事露見して先生は三州とともに一旦平田村太田包宗の宅に潜伏し更に衆と共に大岳を越え宇佐郡安心院谷に落ちました。同志はここで重松邸を根拠地として歌合せに事寄せて謀議を續けてゐたのですが、又もや偵吏に覚られたので先生は矢田宏等と共に木蓑の木下氏方に潜伏し長三州は父南染の門人の家に隠れましたが草を分けての詮議に更に四散いたしました。時枝翁入獄手読書に拠れば慶応元年の暮には、先生は天草で活動されてゐた筈ですが、他の資料では如上の木子岳事件に活躍されてゐることになってゐます。軽卒に判断すべきでないと思ひますから、暫く予盾のまゝ掲げておきます。楠公会組織の日も亦同様で御座います。

宇佐神宮呉橋の袂に一構の邸宅があります。寄藻川の清流に臨む浦酒を極むる其の別邸こそ宇佐神人志士時枝重明の住居であります。時は慶応二年、頃しも神無月の末の方宵から吹き荒んでゐた風は神苑の樹に納つて、夜は深々と更けて参りました。妻い半輪の月は今や密雲に隠れんとして、静さを破るものは唯深々たる流水の音ばかり、窓を固く閉した一室には先に先生に合聚した楠公合員を併せて当年の志士十有数氏が一穗の寒燈を取囲んで勤王計劃討幕の手段を論究してゐます。先づ長三州が眉をいからして天下の大勢を論じました。『見よ諸君、幕府は大勢の傾くをも知らず暴威を以て勤王の志士を除かんとして居る。安政戊午の獄を初めとし、爾來忠貞の志士は悉く其の毒手に斃されて居る。而して幕威は日に傾き民心は幕府を離れて皆王

室に帰向し、天下有為の士は彼が滔天の罪を鳴さぬものはない。討幕精神は既に天下に瀰漫してゐるのである。而して幕府はこの六月大挙兵を長州に加へたが、積弱の幕軍因より長洲の敵ではない。敗幕威は地に委したものである。前年大和五条、但馬生野の義兵は不幸失敗に帰したが、惟れには彼等の失敗は天の時地の利両方ながら之を得なかつたからである。然るに我が九州は彼の関ヶ原以後反幕精神充滿し、島津大友の雄藩皆徳川氏に好感を以つてゐない。近來盛んに佐幕を唱へた小倉藩の如きは、痛く長州に破られ、今や田川郡の片隅に瘡痍を養つて居る。此の時に當り、我が同志小數といへども蹶然起つて大義を唱へ奸惡無道の郡代窪田を誅し、檄を豊筑に伝へたならば義によつて集るもの決して僅少ではあるまい。成功亦疑ひなし。五〇人が奉公の時は此時を描いて外にないのである。』と語氣沈痛満座大に感激致しました。やがて我が青木猛比古先生は眼光鋭く合衆を一瞥しながら、「今長君の如く、討幕の兵を挙げんには時機已に熟してゐる天の与へた此の機を逸することは出来ぬ。此上は実行手段を講究すべきである。其の何地に根拠をおくべきか是が先決問題ではないか、永久此の宇佐の地を根拠地となすべきか、日田を襲撃して該地に本陣を構へるのも一策であるが、海運の便なき地に長營の不利を思ふのである。むしろ然るべき地を相したい。」と根拠地問題を提起いたしました。すると佐田内記兵衛が「日田は退いて守るの地であつて進取的に計を定める地ではない。予は我が馬城峯を以て最も屈意の地となすものである。東豊後諸藩を制し、西に進んで九州の関門を厄すべく、抛つて以て九州を控制するに足り、而も地は肥え慷慨悲歌の士多し、一里許西には四日市陣屋があり、幕府直轄地の中心である。其の農兵ばらを追払つて牙營に充つるも一興であらう」と、馬城峯を以て根拠地となすべきことを痛論いたしました。下村次郎更に兵器糧食問題を提出し、高橋清臣は進んで首領問題に説き及ぼしました。「吾々の挙兵の目的は勤王討幕である。されど志士を綜纜し整々堂々の陣を張り大事を決行しようとするれば、須らく地位あり名望ある首領を戴き其の指揮号令に従ひ進退を律せざるを得ぬ。五条の兵が中山侍従を戴き上野の兵が沢三位を奉じたが如く、資望ある卿相を首領に仰がねば仮令同志幾萬を集めても狗盜草賊視される恐れがある。当豊州の小藩、事を俱にするものなし、京師に於て然るべき卿相を請ひ之を奉じ、激を四方に伝へ以て同志を四方に募る。余は之を最急務とするものである。」と論議酣なる折柄、母

屋の方より家人慌しく駈込んで主人重明を招き何事かひそひそと語ってゐましたが聽て重明座に帰り声を潜めて、「今夜人の告ぐるところによれば十数名の捕吏我が邸宅を囲み長男の佐否を問うたので、家人は近所の歌人達が歌の会をして居るが左様な人は居らぬと答へた。すると捕吏も是非なく胡散な目付をしながら立去つたとの事である。」と告げた。本邸は一方川に臨み三面は堅牢なる高壁を廻らしめあれば捕吏も容易に近づくことは出来ぬが、夜も更けたし前途大望を抱ける諸子にして若し捕吏の手にかゝつては多年の苦心も水泡に帰す。幸ひ暗夜と降雪に紛れ姿を隠すが得策ではないか」とさゝやきました。一座は驚き或は憧憬し中には刀を執つて一撃を加へようといきまく者もありましたが、長光太郎は更に動ぜぬ態で「日田代官の物色するは余一人である。余一人跡を晦ませば追手の手を緩くする訳であります。余は是より馬関に渡り同志を集め此の拳を声援すべく遺憾ながら暫時袂を分たんと」と、縷々意中を披瀝し、匆々行李を整へて起ちました。一全は声を吞んで門口まで見送りました。折柄初冬の夜の空定めなく真黒くかき曇り綿雪の音さへ添うて突に断腸の思あらしめたのであります。先生以て一同も亦四散して時機を窺ふこととなりました。是ぞ三年の後即ち明治元年正月七日兵を四日市に与げ馬城峯に錦旗を翻した所謂御許山騒動の序曲であつたのであります。先生は夫から各地に潜伏して同志の糾合に力め、一旦郷里の柏江にも帰つて来ました。其の時姉ますの掣波村政吉から金二十両を当借して運動費に充てました。其の借券が今猶ほ其の家に残っています。

借券

一金式拾両也

右者此度周旋料不足に付前書の金子致借用候処実正証如件

寅十二日

白川御殿内尊攘軍周旋方

青木猛比古

豊後佐伯浪越村政吉殿

日田郡代は三州等が宇佐時枝の家に会合した事を嗅きつけ、数十名の捕吏を使って邸を取囲み、主人重明並に奥並継等を捕

へさせ更に首藤周三をも其の家に捕縛させ悉く之を日田の獄に投じました。先生も或夜柏江野々下儀平太（故野々下道太郎氏亡父）の宅で夫人龍子、嶋精一郎、全きぬ子夫人、森保等と共に談話中捕吏襲来の急報に接し直に龍子夫人を浪越に避難せしめ、嶋、森等と共に裏山を攀ちて難に出て、折柄鼻面に淀泊中の福寿丸に投じ漸く危険を免れました。野々下儀平太は其後、桂小五郎、長三州、嶋精市郎、先生等幾多の志士を逗留せしめた藤により日田代官所へ召されましたが巧妙なる弁解により百日の禁足に処せられたばかりで無事帰って参りました。

柏江を通れ出た先生は其後下村、佐田、矢田三士に邂逅し相共に難を避け馬関に渡りました。折柄三州は阿弥陀町の中央にある一旅館豊後屋滝五郎の一室に報国隊の志士若月隼人、藤林六郎の二士と共に情意投合大に時勢を論じてゐる処でありました。そこへ先生の一行が物騒な風米で訪ねて来たのですから名代の俠客豊滝も恐れをなし、慌しく走りこんで声を潜め、「唯今浪人態のもの三四名店頭に見はれ長光太郎に面合したいから通せよといふ。何人かと問へば怪しいものにあらず面合すればわかると申してゐる」と告げました。すると「姓名をも名乗らず面合を求むるとは無礼千萬な奴」「必定偵吏であらう」と二人が息巻けば、三州「偵吏ならば面合を求めずに踏入む筈」「然らば面合を求めませう」と若月が起れば藤林統いて刀を掲げて出て見ますと偵吏と思ひきや長三州が無二の同士、先生以下の四人だったので緊張しきった場面は忽ちカラカラと打笑ふ滑稽の幕にかはったわけでありました。先生一行は一別以来の情勢を詳かに物語り互に無量の感慨に咽んだのでありました。がやがて女中等の齋らす酒肴に興をやり暫しが程は不遇も何も忘れて志まひました。

翌日前途取るべき手段を二決し佐田は暫く当地に止まって長人に接触し且つ同志操縦の任に当られ矢田は長崎に赴いて兵器弾薬の購入方法を講ずることとし、先生と三州、下村の三人は一旦豊州に立帰り同志を絃撫し日田の動静を窺ひ、猶同志原田七郎、高橋清臣の兩人と時枝郎の決議に基き京都に遣はし有為貴縉の選抜に当らしめることとして各其の部署につくことになつたのであります。時に慶応二年十二月でありました。

慶応三年五月上旬今一度郷里に帰って参りました。原田、高橋の兩名は此月七日中津を発し上阪しましたが、川口に着くと、

かねて日田よりの通知があったものと見えて、幕吏数十名之を海岸に迎へ捕縛しようとしたので今は之迄と原田は忽ち其の一人を斬殺し数名に重傷を負はせた後海に飛込んで自殺し、高橋も刀を執って立向ひましたが衆寡敵せず重傷を負うて遂に縛せられ、日田へ護送の途中船中で亡くなりました。此変を耳にした同志等は且つ憤慨し且つ落膽したのでありますが、此のまゝに止むべきではありませんから、更に前挙を計り、先生と下村両氏は夙に諸国を歴遊し、殊に京都にも永く止まって貴籍にも近づきが多いので貴籍推戴の儀は両氏こそ最も適任であかうと再び京都に赴かせる事になりました。しかし何かの都合で二人は同行しなかつたのであります。下村は今度こそはと警戒おさおさ怠りなかつたのですが、途中案内平穩に京都につくことが出来ました。そして其の後間もなく小嶋長年のつてゝ愈々左中將花山院家理卿を推戴する手筈がついて、先づ目的を達した訳であります。が、倅一方先生は大阪までは確かに無事に着いたのですが、それから先が愈々迷官に入つて全くわからないのであります。

佐伯藩士山口忠夫氏の談によれば、氏が大阪勘定所に勤番してゐた時、或日先生は素ツ裸に酒孤を纏つて門口に走込み救助を乞ふたのであります。氏は禍の藩公に及ばんことを怖れて裏門からそつと逃れさせると、時を移さず佐幕派の浪士二人白刃を提げて追うて来たさうです。それ以来先生の姿を全く見ないといふことであります。又柏江古老の談では、先生が市谷の叔父某と共に大阪法雲寺に逗留の際、一日狼士態の者の誘出しにより叔父を伴ひ外出したまふ二人とも遂に方不明になつたと申して居ります。更に宇佐方面では、先生は京都三条橋上にて浪士の為に斬られたとも申してゐます。一向其の真相を明かにすることを得ませんが、何れにしても回天の偉業半ばにして鮮血を浴びて斃れた事は返す返すも遺憾に堪へぬ事でありませう。時に先生齡三十有七噫！先生の遺品は胃甲、刀劍、勤王旗破片、陣羽織地、短冊感状、書翰、色紙、色紙台、借券、旅券等種々有りますが其の中に自ら画師に描かせた肖像書が二幅あります。一幅には

「國の為かねてなき身とおもひ入る矢たけ心にはらふ夷ら」
他の一幅には其の上方に

「恐り猪の猛き心を心にてかへりみせぬぞ日本ますらを」

と雄健なる筆力に任せて自署し傍に「みずくかばねくさむすかばね」と刻んだ遊印を押捺してあります。

「恐り猪の心といひ」、「やたけびの心」といひ又名を猛比古と改めたる、先生が如何に大君の御為に屍を晒すべく大勇猛心を高潮されて居ったかを想見することが出来ます。それで先生は其の武術を鍛練することも頗ぶる猛烈だったものと見えまして、剣道の如きは当時餘程鳴響いたものでありました。慶応元晩秋、木子岳の密議曝露後、窪田代官は別府方面に潜伏せる長三州を捕縛せしめんと捕吏を遣はしました。此時先生は高崎山の海浜に腰を下して鈍豆烟管で煙草を薫らしながら静かな沖の鷗の行く方を眺めてぬました。高山西涯入道の率ゐる捕吏の一隊はいち早くそれと気づきましたが、何しろ先生は二豊志士の中で名におふ剣道の達人とあつて、若し之に立合つて不覚を取つたら当面の三州逮捕の使命を果すことが出来ず、窪田代官に討して申訳がないといふので、誰一人先生に近づかうとするものなく、見て見ぬ振りをして一隊は素通りして志まひました。先生も刀の束に手をかけはしましたが、通過する一隊を尻目にかけてたまゝ遣り過しました。後日先生は三州に「あの時高山を取逃がしたのは残念だった。噂にきいて居った高山そっくりの風体だったが若しか人ちがひではないかと思つて見合せたのだ」と洩したさうであります。是は日田帆足悦威翁が維新後三州から聞た話でありました。

今一っ此の私が敬服惜ゝ能はざる物語りがあります。夫れは先生が柏江に帰つて居られた時の事であります。丁度其の頃佐伯藩の士に鎗術本心鏡地流の達人下川角之助といふ者がありました。角之助は安政初年より文久の晩年にかけて、北松前藩より南薩摩藩に亘る三百諸侯の道場を踏破しつ、修業せられた豪雄であります。角之助適々親族なる塩月村疋田実の宅に閑日月を送つて居ました。野々下儀平太、疋田実の両子は剣鎗両雄の髯枝に少からぬ興味を咬られ、先生及び角之助の両士を説いて遂に仕合を承諾せしめたのであります。愈々約束の日が参りました。醇酒の香氣薫する野々下の酒倉の中で大きな親桶を背景に稜々たる初討面の挨拶を交換し、各特異の身構よろしく一礼して立上りましたが暫しが程は爛々たる二対の視線が面の中に交

錯するばかりでありました。やがて戦機動いて何れより攻撃に出たものか疾風の如き竹刀の閃き、酒倉の中は見る間に凄壮の氣に充されて了ひました。二子以下觀衆は此の妙技に眩惑させられてゐましたが、一機先生に隙が見えたか、角之助満身の力を籠めて槍を抜くよと見れば此の時早く彼の時遅く、先生の単軀既に翻りて「お面ツ！」と鋭き一声は酒倉の厚い壁に凄く響き渡つたのであります。其の後、正田実は角之助に再度の仕合を勤めましたが角之助は決して諾とは言はなかつたさうでありませぬ。六十餘州を遍歴すること十星霜、天下の槍客數万を相手に技と膽とを練つた角之助が二度と仕合なかつたといふところに、死線の上に鍛上げた先生の懼るべき神技が認められるのであります。西涯入道が怖れをなしたといふのも尤もだと頷かれます。先生の武術は単に劍道に止まらず、跳躍術、潜行術など枝神に入るものがあつたといふことであります。併し先生は単なる一偏の武人ではなく、又閑日月の所有者だつた事は前に屢々引用した漁詩、和歌等でも窺はれますが、茲に猶ほ一つの挿話があります。

—先生は或日江国寺玉海師外二・三子と共に柏江酒屋の二階に合し宴を開いたことがありますが、欄間の懸額三州の書を見て、先生は戯れに玉海師に読解を求めたのであります。玉海は謙遜して之を辞しました。すると先生はからからと打笑ひ、筆おつとり鼻紙を開いてすらすらと一首を書き下しました。

(世見知ず) (揚火)
よみしらずびやの玉にもならざれば円き頭(僧頭)はある甲斐(貝)もなし読不知(世見しらず)

牡蠣採主 柏江茂 八郎

よみしらずは読みしらずに世見しらずを懸け、牡蠣採主は書取主で蠣は柏江古来の名産物であります。一座此の巧妙なる即興にどっと打興じたと申します。先生は婦郷されても、捕吏に対しては警戒を怠りませんでした。夫れでも夜陰に乗じて城下に出で大に宜伝に努めたものであります。先生の親しく交つてゐた藩士は高橋熊太、長谷川統、関守人、尾間元吉、田中広、阿南勇、古川某、等の七子だつたさうであります。是等の士は竹田藩士小河弥右衛門、掘謙之助等とも親交があり、又勤王僧鼎州和尚とも交渉があつたと伝へられてゐる。最後に竜子夫人について一言叙述致します。

夫人は直入郡朽綱村に住つてゐましたが、先生と一緒に或時は柏江に或時は宇佐に或時は光吉に転々移動せられた様子であります。周三氏は夫人を「京都の人で学門もあり筆跡は殊に見事であった」と申してゐました。其の容姿言語動作の典雅であつたこと裁縫手芸活花等に堪能であつた事などは今猶柏江老姬等の記憶に新たなるところであつて、其の学問と筆跡との勝れてゐたことは当地に遺つてゐる夫人の書翰がよくこれを物語つてゐます。其の書翰は一面先生の席温るひまなき志士牛^一を反映してゐますから一寸掲出して見ませう。

「御手紙有拜見いたし候久々御疎遠之処御家内様並に西雄様にも御前御機嫌克く御暮しの由目出度存上參せ候、扱て茂八郎事其の後何国方よりも何たる事も相分り不申其地へも如何と存じ一昨年の頃よりも手紙認め兩三度も慥なる幸伊に血縁のもの或は同城下獅子問屋宛にて御方角の人へも相頼み候へ共一度も届き候様子も無之候、私も其後病氣も格別に勝れ不申候へ共追々快方之事と存居申候故秋風など催し候はゞ罷出候上、委細御咄申上度と存參らせ候、乍末筆西雄様へもよろしく御伝言被成下候様願上參せ候、乍末筆西雄血縁の人々には伝言の儀おん取斗ひ可被下候、あらあらかしこ
水無月 利与

佐伯柏江野々下仙造様

かへすゞ何なりと土産さし上度存じ居候へどもさし当り田舎の事故之ぞと思ふものも無之何卒御推もじ被下度候、又小谷に預置候品物中主なものへ虫ほし可被成下候様御取計願上候」

其の文章といひ筆致といひ実に掬すべきものがあるではありませんか。併し夫人が果して首藤氏の言の如く京都の婦人であつたかは疑問であつて此の点目下調査中であります。

斯くも優雅な夫人は一面毅然たるところがあつて、捕吏襲来の報を得て波越に避難した当時の態度の如き頗る鮮かなもので人をして天晴志士の妻よと嘆賞せしめたと申します。慶応三年正月夫人は貴縉推戴の使命を帶上京する先生と暫しのお別れを惜みましたが夫れが遂に永久の訣別となつて了はうとは何といふ痛はしい縁であつたことせう。後往年の楠公合員小山田貞一氏は先生の形見として脇差一口を京都より持帰り多年夫人の所在を探し求めたのですが遂に邂逅の機なく、小山田氏も

数年前高令を以て遂に永眠し先生の魂魄籠る一刀は謎の如く今猶に宇佐小山田家の刀架に横はってゐるのであります。

三条橋上涙をふるって、「草莽の臣」高々に呼ばはった彼高山彦九郎は実は歴とした伝統を以った門閥でありました。全じ三条の橋上で唐紅の血潮をひて華と散った我が青木猛比古は「代々医を業とす」と嘯いてはゐたが実は真正銘の「草莽の臣」でありました。勿論「草莽の臣」といふ語はお上に討して謙遜して申す語なるが故、日本国民すべて萬乗の君に討しては草莽の臣でありましたが、先生の如きは、ほとんど地位もなく、草より生れて草にかくれた志士であるのであります。其の家業と称した医の如きも勿論世襲の業にあらずして、かりの世にすがたをくらますたづきの一助に過ぎなかつたのであります。由来幕末の勤王家と申すものは殆んど原則として朝臣、武士、学者、神官、僧侶、医師等の智識階級の家の出にかぎられてゐるのであります。我が猛比古先生こそは実にその例外として、下級農民の家庭から身を挺した唯一無二とも申すべきプロ勤王家なのであります。先生の赤き心の陽に向ふ勤王の赤誠が、永く社会から閑却されて、殆んど草にうもれてしまつてゐる原因の主なもの、慈に存する事を思ふ時、五尺の衷心暗涙にむせばざるを得ないのであります。

武士となつてはじめて帰郷された時、馬背からひらりと飛び降りた先生が土庭に平身抵頭、みじろぎだにせぬ、姉に「俺だ茂一郎だ」といった時の気持は、果して如何であつたであらうか、故郷にかざる錦衣の感も束の間に消えて、そこには唯幻滅の悲哀の外何者も残つてゐなかつたのであります。先生のかつて故郷に送つた書翰の中に次の如き一節があります。

(前略) 誠に申送り候も赤面の至りに候へ共親類縁者の中に疇人も東西の分り候者無之これのみ残念に存候、殊更姉様衆中皆々愚人にて婦人滞在中も不都合衆人の手前気の毒千萬向後帰国も候はば柏江酒屋住吉丸の内に滞留の覚悟に候間此段両家まで貴様より通じ置被下度候(後略)

「代々医を以つて業とす」と申された先生の心事が想ひやられます。而して其の王事に斃るゝ後も勤王の何たるを解せぬ郷党の百姓たちは、唯行方の不明として深く顧慮するところなく漫然として今日至つたのであります。しかして亦竜子夫人に先生の血縁をひくものゝ生れなかつたのも、先生の事蹟の埋没せんとしてゐる一因でもあるのでせう。されば葬儀も営まれず、

戒名もなく勿論墓石もありません。先年陸軍大演習が豊前平野に挙行されるや「馬城峯勤王顛末」江島文吾氏御前講演の選にもれ、其の誠忠は天聴に達する千載一遇の機会を逸してしまひました。春風秋雨六十年、枯骨いづれのところにか哭し、魂魄何れの辺に迷へることであらうか。あはれ草奔の志士青木猛比古先生。あゝ(終)

(昭和六年一月 記)